

独思録：「小沢叩き」(1/24)

テレビ朝日の「スーパーモーニング」だったのでしょうか。点けっぱなしのテレビから、解説者の鳥越俊太郎の、東京地検やマスコミの「小沢叩き」に血道を上げるかのような過熱気味とも言える最近の報道に対し冷静さを求めた発言と、大澤孝征弁護士の検察はだれからも怖がられる存在であることが必要との反論を、ちらっと耳にしました。

鳥越さんの発言には納得できたものの、大澤弁護士の発言には空恐ろしさを感じました。

確かに法の番人としての検察の重要性は分っているものの、検察が絶対正しいとは限りませんし、過っての治安警察のように怖い存在であってはなりません。信頼できる存在であるべきです。

つい最近、冤罪事件と判明した足利事件でもお分かりでしょう。検察が絶対ではありません。4歳女兒が殺害されたという痛ましい事件で、検察はやっきとなり、冷静さを忘れていたかもしれません。犯人をでっち上げたとは思いませんが、結局は検察の捜査情報とそれを鵜呑みにしたマスコミの報道が、冤罪事件を引き起こしたとも思われます。

その中で、大新聞がタブロイド紙と卑下してやまない日刊ゲンダイが、1/9付で「検察と大マスコミの小沢叩きの勝敗」と題し、次のような記事を載せています。

「きょう聴取するらしい」「いや聴取は週明けだろう」「最終的に東京地検は小沢一郎を逮捕するつもりだ」。 「小沢逮捕説」まで流れ、週末の政界は一気に緊迫した。小沢幹事長の資金管理団体「陸山会」の不動産取引問題は、来週がヤマだ。

いくらなんでも逮捕など出来るはずもないが、地検特捜部は通常国会が召集される18日までには、小沢幹事長を任意で調べる方針。「陸山会」の当時の事務担当者だった石川知裕衆院議員(36)を、来週中にも「政治資金規正法違反」で在宅起訴する予定でいる。通常国会が「小沢疑惑」一色になるのは、間違いない。

大新聞・テレビも、これでもかと疑惑を騒ぎ立てている。「4億円 台車で運搬」「入金通帳『先生』とメモ」とデカデカと報じている。

しかし、地検の動きも、大マスコミの報道ぶりも、どう考えたっておかしい。常軌を逸している。……

何時もとは逆の報道です。確かに小沢幹事長も説明責任を果たしていないので、検察側の情報だけしかないのかもしれませんが。しかし、色々の情報源を持ち、日頃からクオリティ・ペーパーと自負している大新聞社のこと、独自の取材でタブロイド紙に上記のような批判記事を書かれないように頑張っただけで欲しいと思います。

夢野久作の「お金とピストル」というのがあります。

「泥棒がケチンボの家へ入ってピストルを見せて、お金を出せと言いました。」という行から始まります。ケチンボをゼネコンに、泥棒を政治家の秘書に代えると、「ただお金を出すのはいやだ。その工事の落札に口を利いてくれるなら5千万円出そう。お前は私からお金を貰えば先生はお喜びになるだろう」

政治家の秘書は考えておりましたが、とうとうゼネコンから5千万円を受け取りました。

その後、工事の受注が不首尾に終わると、ゼネコンは、すぐにも政治家の秘書を呼んで、「さあ、そのお金ばかりでない、今ままで注ぎ込んだお金もみんな返せ。返さないとマスコミに垂れ込むぞ。」

と怒鳴りました。

政治家の秘書は腹を抱えて笑いました。

「アハハ。その金は政治資金として、きちっと処理している」

と言うや否や表へ出て行きました。ゼネコンは早速マスコミを巻き込んで、泥仕合を始めましたが、やがて聞きつけた検察が二人を押えて事情聴取に連れて行きました。

検察でいろいろ調べてみますと、政治家の秘書が貰った5千万円のお金は、みんな口利きのお金で、政治資金の報告には書けず、記入漏れで処理した、やっぱり賄賂の性格をもつお金でした。

双方共牢屋へ入れられました。

となりますが、今回の「小沢叩き」はどのような決着となるのでしょうか。冷静に推移を見詰めたいと思います。



< 夢野久作「お金とピストル」 >

泥棒がケチンボの家へ入ってピストルを見せて、お金を出せと言いました。ケチンボは、「ただお金を出すのはいやだ。その短銃（ピストル）を売ってくれるなら千円で買おう。お前は私からお金さえ貰えばそんなピストルは要らないだろう」

泥棒は考えておりましたが、とうとうそのピストルを千円でケチンボに売りました。ケチンボは泥棒からピストルを受け取ると、すぐにも泥棒を撃ちそうにしながら、「さあ、そのお金ばかりでない、ほかで盗んだお金もみんな出せ。出さないと殺してしまうぞ。」

と怒鳴りました。

泥棒は腹を抱えて笑いました。

「アハハ。そのピストルはオモチャのピストルで、撃っても弾丸（たま）が出ないのだよ。」

と言ううちに表へ逃げ出しました。ケチンボはピストルを投げ出して泥棒を追っかけて、

往来で取っ組み合いを始めましたが、やがて通りかかったおまわりさんが二人を押えて警察へ連れて行きました。

警察でいろいろ調べてみますと、泥棒が貰った千円のお金はみんな贖物のお金で、ピストルはやっぱり本物のピストルでした。

二人共牢屋へ入れられました。



< 夢野久作 (1889-1936) >

SF 作家、探偵小説家、幻想文学作家。本名杉山泰道。福岡県福岡市出身。慶應義塾大学文学部中退、福岡で農園を営む。

その後、僧侶、謡曲喜多流の教授、『九州日報』(後の『西日本新聞』)の新聞記者を経て、ルポルタージュや童話を書くようになり、大正 11 年に杉山萌円の筆名で童話『白髪小僧』を誠文堂から刊行した。



大正 15 年には、「あやかしの鼓」を雑誌『新青年』の懸賞に発表して二等に入選、作家デビューを果たす。

日本探偵小説三大奇書の一つに数えられる畢生の奇書『ドグラ・マグラ』をはじめ、怪奇味と幻想性の色濃い作風で名高い。またホラー的な作品もある。

著作に『あやかしの鼓』『夫人探索』『いなか、の、じけん』『人の顔』『瓶詰の地獄』『死後の恋』など。

春秋：「極端とは」(1/20)

「普通では考えられないほど程度が極端であること」。「笑い」や「騒ぎ」の前につく「ばか」を、新明解国語辞典はこう説く。極端とは悪いことが多いから、「はした借りまで書き置きのばかりちぎ」と江戸川柳でもからかっている。

しかし、万事「ばか」が悪いともいえまい。コト政治資金について政治家に求められるのは、ばか律義なのだ。元秘書らが政治資金報告書の虚偽記入の疑いで逮捕されている民主党の小沢一郎幹事長も、そう思っているのか。そうであってほしいが、どうもくだんの川柳作者と同じ心持ちが見え隠れしてならない。

国会では野党に追及され、幹事長への律義のほどが少々極端にも見えた民主党の面々からは、小沢さんの姿勢への批判もチラホラと出始めた。自らも、東京地検特捜部が求めている事情聴取に応じるという。かくなるうへは、複雑な金の流れの一切を包み隠さず開陳されるよう、こちらもばか正直に願うしかない。

列島はつかの間春さながらだが、きょうの大寒から立春までの半月はもっとも冷え込む時期だ。だからこそ、しゃんとするのだという気になる。再生へ多難な道を歩み出した日本航空の関係者も同じ思いだと信じたい。高浜虚子に「一切の行蔵寒にある思ひ」の有名な句がある。行蔵とは、出処進退の意味である。

<高浜虚子(1874-1959)>

俳人、小説家。本名・高濱清。愛媛県松山市生まれ。

伊予尋常中学(現在の愛媛県立松山東高校)在学中、正岡子規に兄事、俳句を教わり子規より虚子の号を受ける。柳原極堂が松山で創刊した俳誌「ほととぎす」に参加。



後に、虚子が引き継ぎ東京に移転し俳句だけでなく、和歌、散文などを加えて俳句文芸誌として再出発。

ホトトギスの理念となる「客観写生」「花鳥諷詠」を提唱。

子規の死後、俳句の創作を辞め、その後は小説の創作に没頭。

句集に『虚子句集』『五百句』『五百五十句』『六百句』『虚子俳話』『句日記』、小説集に『鶏頭』『柿二つ』『俳諧師』『虹』など。

天声人語：「自白の舞台裏」(1/23)

パスカルの言に 時は苦しみや争いを癒やす。それは人が変わるからである がある。しかし、歳月が苦しみや争いを際立たせることもある。20年近い時は、2人の男性に苦い再会をもたらした。

「足利事件」の再審公判で、ぬれぎぬを着せられた菅家利和さん(63)を取り調べた元検事、森川大司さん(62)が証人として出廷した。謝罪を求める菅家さんに「深刻に受け止めています」を繰り返す。すげない応答は、検察組織が「取り調べに問題なし」としているためだろう。

調べの録音テープも流された。両者の立場は今と逆である。無実を訴え始めた菅家さん。検事はDNA鑑定の結果を突きつけ、たたみかける。「どうなんだい。ずるいんじゃないか、君」「なんで僕の目を見て言わないの、そういうこと」。

返答を促す検事がたまに発する「うん?」「ん?」が効いている。口調は穏やかでも、力関係に天と地の違いがある。短い鋭い矢は菅家さんの心を刺し、口をこじ開けた。「ごめんなさい。勘弁してくださいよお」。

涙ながらに絞り出したのだろう。身に覚えなき殺人を何度も「自白」させられる悔しさはいかばかりか。否認から「再自白」に至るやりとりが当時の法廷で明らかにされていたら、と思わずにはいられない。

調書には、長い沈黙も「ん?」も嗚咽(おえつ)も残らない。調べの様子がそのまま記録されていれば、「自白の舞台裏」が見えてくる。菅家さんの冤罪から、教訓や反省以上のものを残したい。残しないと、鉄格子の中に消えた17年半が本当の無駄になる。

< ブレーズ・パスカル (1623- 1662) >

フランスの数学者、物理学者、哲学者、思想家、宗教家。17歳の時に、機械式計算機の構想・設計・製作に着手、2年後に完成を手始めに、「パスカルの定理」を発表、「確率論」の創始や流体の平衡についての理論である「パスカルの原理」の提唱など、自然科学系の業績を多く残している。



また、思想家、哲学者、宗教家として、ポール・ロワヤル修道院に近い立場から、1656年～1657年にかけて『プロヴァンシアル』の発表。神の「恩寵」について弁護する論を展開しつつ、イエズス会の道德観を非難したため、大きな議論が巻き起こった。

また、キリスト教を擁護する書物(護教書)の執筆に着手、死後整理されたノート、メモ類は、『パンセ』として出版され、後々まで人々の思想に大きな影響を与え続けた。

著書に、『円錐曲線論試論』『プロヴァンシャル書簡』など。

編集手帳：「捜査への介入」(1/23)

あわて者の女房が道で伊勢屋のお内儀（かみ）さんに会い、「旦那（だんな）さまは、おかわりなく…」と言いかけて、伊勢屋の主人が3か月前に死んだことに気づき、「お亡くなりになったまんまでござんすか？」。江戸の小咄（こばなし）にある。

失言は誰にもある。普通はこの女房のように口走った瞬間、「まずい！」と悟るものである。一夜明けてようやく悟るのは、よほど言葉に鈍感な人だろう。

鳩山首相はきのう、“小沢資金”疑惑の石川知裕容疑者（民主党衆院議員）について「起訴されないことを望む」と語った前夜の発言を、不適切と認め、撤回した。

検察のトップ、検事総長の任免権は内閣にある。内閣の長たる首相の不起訴祈願は、捜査への介入とみなされても仕方がない。口走った直後に取り消しても遅すぎるほどの重い失言である。検察当局を批判する小沢一郎幹事長に告げた「闘ってください」。普天間問題でオバマ米大統領に告げた意味不明の「トラスト・ミー」（私を信じて）。ため息も、3度目になる。

小咄に出てくるあわて者の女房が、にわかに見識のある常識人に思えてくるから、困った政権である。

<江戸小咄>

小咄は小噺、小話とも書かれ、江戸初期に笑話を集大成した『醒睡笑(せいすいしょう)』が出てから、笑話は軽口(かるくち)、落し噺(おとしばなし)などと呼ばれて一般に愛好されていた。

特徴は、話が短く、笑いの中に人情や世相の様子をたくみにとらえ、結末をおかしさで結び、文体が簡潔で、軽妙洒脱な、江戸っ子好みの歯切れのよい噺である。

明治中期以後、長い一席の落語に対して、まくらの笑話や、短い独立した笑話を小咄と呼ぶようになり、今日では、江戸で盛んになった笑話の小咄と、それ以前、上方で盛んに作られた笑話の軽口話の両者を合わせて江戸小咄と呼んでいる。



余録：「竈の神の記録は？」(1/23)

「聞くならく梅花は暁の風にひらくとノ雪のごとく堆(うず)たかく遍(あまね)く四(よ)も山の中に満つ」。梅を愛した宋の詩人、陸游(りくゆう)(号は放翁)の詩だ。梅は明け方の風にふれて開くという、積もった雪に似た花が山中に満ちるとの意だ。

暦は寒中だが、早咲きの梅の便りが各地から届く。陸游の詩はその先の発想がすごい。「何の方(すべ)もてか身を千億に化(わ)けノ一樹の梅前に一放翁たるべき」。この身を千億の分身にして一本一本の梅の前に1人ずつ座らせたい。そういうのだ(一海知義著「漢詩一日一首」平凡社)。

たくさんの梅の木それぞれの前に同じ老人が座っているユーモラスな様が思い浮かぶ。分身の術を用いる神仙のような発想は中国の道教のものだろう。道教では仙術や仙薬が信じられる一方、人の日ごろの行いはさまざまな神々に監視され、記録されていると思われていたようだ。

「司過神(しかしん)」と呼ばれるそんな神のうち、各家にいるのは竈(かまど)の神、人の身中にあるのが三尸(さんし)という虫だ。天にすまう司過神もいて、そのうちの北斗七星の神である北斗は毎月3と7のつく日に地上へと降り、人の行いをチェックするという。

では小沢一郎民主党幹事長の家の竈の神は問題となった土地取引資金をめぐる動きをどう記録しているのか。できるならそれをのぞいてみたいこの間の成り行きだ。東京地検は先日まで聴取に応じなかった小沢氏にきょう事情を聴くという。

竈の神に代わって政治資金の動きをありのままに記録するよう求める政治資金規正法である。過去に「政治資金の透明性」を誇っていた小沢氏なら分身の術は無用だ。地検への説明は早急に国民にも明らかにしてほしい。

< 陸游 (1125-1210) >

南宋の政治家・詩人。字は務観。号は放翁。越州山陰(現在の浙江省紹興市)出身。南宋の代表的詩人で、南宋四大家のひとり。



現存する詩は約9200首を数え、その詩風には、愛国的な詩と閑適の日々を詠じた詩の二つの側面がある。

強硬な対金主戦論者であり、それを直言するので官界では不遇であった。著作に『劔南詩稿』『老学菴筆記』『渭南文集』『南唐書』『入蜀記』など。

< 一海知義 (1929-) >

中国文学者、神戸大学名誉教授。奈良県奈良市生まれ。京都大学文学部卒。河上肇研究で著名。

中国古典文学の第一人者として、陶淵明、陸游、河上肇など日中両国の歴史のなかで、「ことば」を支えとして生を貫いた詩人・思想家に光を当て、



古代から現代までの身のまわりにある「ことば」の豊かな歴史と隠された魅力を紹介。

古典漢文のみでなく、近代日本の漢文の校訂も行い、河上については著作も多い。

2007年『正伝 後藤新平』の校訂で毎日出版文化賞受賞。

著書に『漢詩一日一首』『河上肇と中国の詩人たち』『漢語の知識』『河上肇そして中国 尽
日魂飛万里天』『読書人漫語』『知っているようで知らない漢字』など。